

今庄宿 散策マップ

今庄観光協会
TEL 0778-45-0074

近世の大宿場町 今庄

古くから幾重にも重なる南条山地は北陸道の難所で、山中峠、木ノ芽峠、枋ノ木峠、湯尾峠のいずれかの山越えの道を選んで今庄に至り、京・江戸へ行き来する人々が最初に宿泊したのが、今庄宿です。

今庄は江戸時代を通じて、宿場として越前で最も繁栄したところです。

初代藩主結城秀康は、北陸道を整備したが、このとき今庄については重要な宿場として計画的に町並みを造らせました。

文化年間(1804~18年)には、街道に沿って南から北へと上町・観音町・仲町・古町・新町の5町があり、その町並みは約1キロメートルに及び、家屋が櫛の歯のように立て込んでいました。

仲町には福井・加賀両藩の本陣や脇本陣、問屋、また多くの造り酒屋や旅籠が集まり、高札場もありました。背後にはお茶屋馬場(旧今庄小学校敷地)があり、宿馬は福井・府中の25匹について24匹を常備していました。

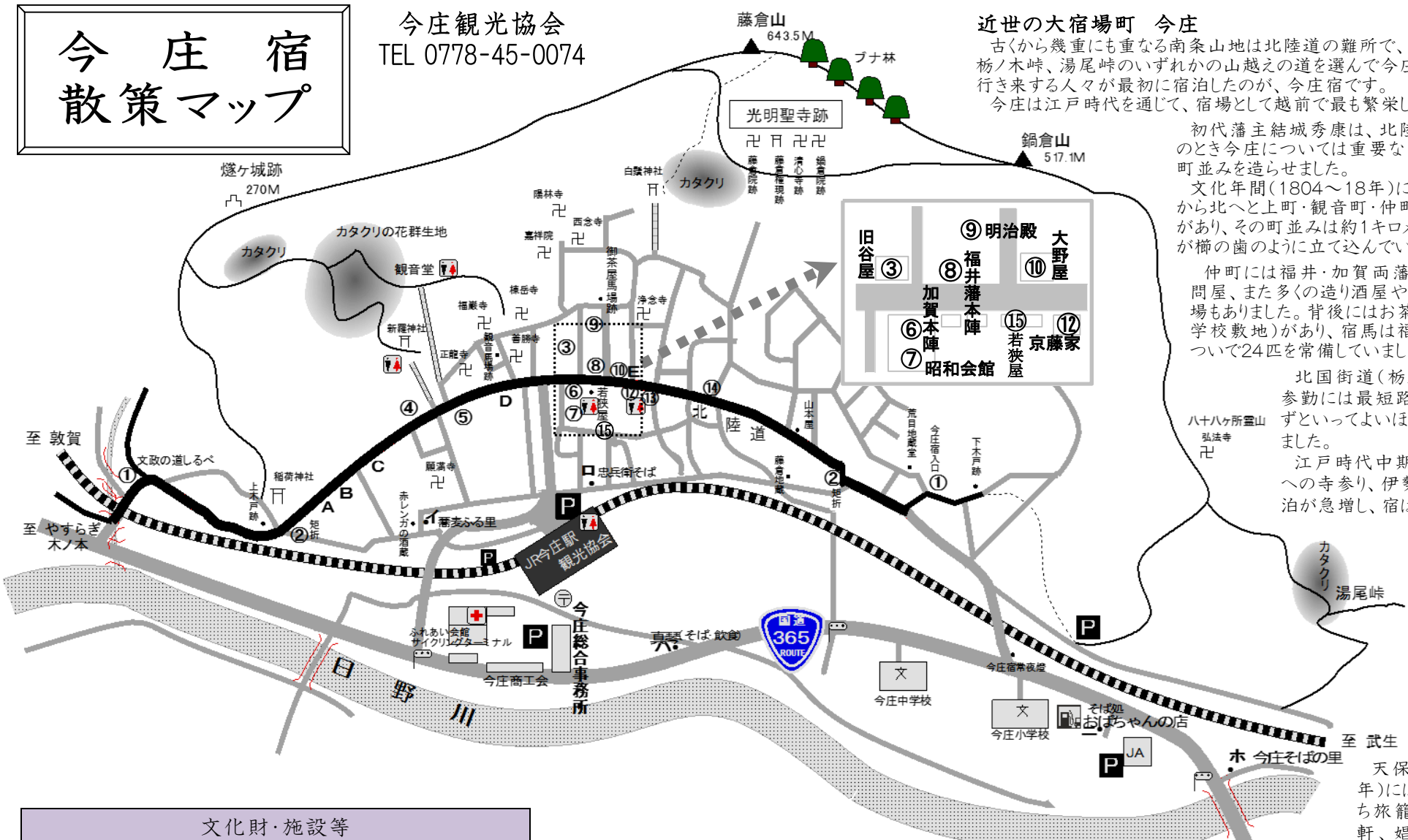
北国街道(枋ノ木峠越え)は江戸参勤には最短ルートで、越前各藩は必ずといってよいほど、今庄宿を利用しました。

江戸時代中期以降は、商用や京への寺参り、伊勢参り等の旅人の宿泊が急増し、宿は繁忙を極めました。

この頃の旅人は一日の旅程として、男は10里、女は8里を見込んでいました。福井から今庄までは約8里であるから、福井を早朝に出立した旅人の多くは今庄に宿泊することになりました。

天保年間(1830~44年)には戸数が290余り、うち旅籠屋55軒、茶屋15軒、娼屋2軒、縮緬屋2軒、烏屋15軒などがありました。

今も昔風の家屋が軒を連ねる町並みは、その長さや道の形や短冊型の屋敷割がほとんど変わっていないこともあって、当時の宿場の面影をとどめています。



文化財・施設等

No	名称	No	名称
③	旧谷屋	⑨	明治殿
④	問屋脇本陣跡 平塚屋	⑩	問屋跡 大野屋
⑤	高札場跡	⑫	うだつの家 京藤家
⑥	脇本陣跡	⑬	問屋跡 旧右衛門佐跡
⑦	昭和会館	⑭	旧西尾茂左衛門家
⑧	大庄屋 本陣後藤家	⑮	旅籠 若狭屋

食べ処(名物そば処)

記号	店名	TEL
イ	蕎麦ふる里	0778-45-0805
ロ	忠兵衛そば	0778-45-0002
ハ	真琴	0778-45-1788
ニ	おばちゃんの店	0778-45-1144
ホ	今庄そばの里	0778-45-0774

酒屋・お土産処

記号	店名	TEL
A	富山酒造	0778-45-0028
B	高野由平商店	0778-45-0003
C	白駒酒造	0778-45-0020
D	酒造北善商店	0778-45-0016
E	堀口酒造	0778-45-0007

至 敦賀
至 やすらぎ木ノ本
至 武生
至 武生
今庄IC

①今庄宿入口

この道より北陸道・北国街道の宿場である今庄宿に入る。入り口は宿場特有の矩折になっており、宿場全体を見通すことができない構造である。右は八十八ヶ所の下を通り、湯尾峠を越え、府中(武生)から福井に至る。

②矩折(かねおり)

今庄宿の街道は、急に屈曲し遠くを見通すことができないように作られている。これを矩折または枳形と言い、武者だまりに使ったり、また敵の侵入の勢いを弱めたりすることができるように防御を考えた構造である。

御札場跡(おふだばあと)

④旧西尾茂左衛門家 ⑥北村善六家

福井藩第四代藩主光通(みつみち)の時の寛文元年(1661年)11月、福井藩がはじめて幕府から銀兌換の藩札の発行が認められた。福井藩内では藩札の使用が強制されたので、藩の南端の大宿場町である今庄では、旅人や商人が金銀を藩札に、あるいは藩札を金銀に両替するために御札場が設けられた。この御札場は、今庄宿では最初北村太平家が、その後北村新平家が、つづいて西尾茂左衛門家が、また享保 15 年(1730年)からは北村善六家が務めた。

道しるべ(道標)

以前は木造であったが、文政13年(1830年)大黒屋由兵衛が世話役となり、笏谷石で建てられた。石柱の頭の部分に火袋があるものは珍しい。北陸道(右京、敦賀・若狭)と北国街道(左京、伊勢・江戸)の追分の道しるべである。

石柱には次のように刻まれている。

「右京 つるが 王可佐(わかさ) 道」

「左京 いせ 江戸 道」

夏舂(くさ)やありがたき 世乃志るべ石 森々庵 松後

御茶屋馬場跡(おちゃやばば)

福井藩の役所・馬つなぎ場

今庄宿では規定により24疋の駅馬が常備されていた。五街道の内、日光、甲州、奥州の各街道や中山道の木曾路の宿に置かれていた25疋と同水準である。馬場はほぼ四十間四方で、周囲より高い土塁で囲まれていた。

③今庄宿本陣跡

本陣は、公家や幕府役人大名などの貴人の宿泊所である。寛永12年(1635年)参勤交代が始まり、大名が江戸と国元の往復に行列を伴って宿場に止宿するようになったことから宿場は発展した。今庄宿では享保3年(1718年)に後藤覚左ヱ門が福井藩の本陣を仰せつけられた。

後藤家は福井藩の上領(43ヶ村)における大庄屋として格式も高く、宿場の指導的な地位を占め、上段の間(殿様のお座敷)を始め部屋数も多く、宏大な邸宅であった。敷地は、間口約十間、奥行き三十七間、建坪は約百坪、部屋数も二十を数え、玄関、南御門、御式台の間、お次の間、お小姓部屋等があり、当時いかに大きな家であったか想像することができる。

明治11年10月8日明治天皇北陸御巡行のみぎり行在所となったが、その後、後藤家は移住し取り除かれた。

昭和8年今庄の篤志家田中和吉氏は、この由緒ある本陣跡並びに行在所を保存することによって、社会教育の資に、又町民憩いの園にと念願して、ここに玉座を中心に明治殿を築造、付近一帯を整備して公德園とし今日に

至っている。

旅籠(はたご)

⑩若狭屋

江戸時代の純粋な旅籠である。昔は屋根が檼板で葺いてあり、風で檼板が飛ばないように石が載せてあった。旅籠は本陣や脇本陣とは違い、一般市民が宿泊する旅宿で、初めは食料持参し薪代などを払う形態であったが、交通量が増大し庶民の旅行が多くなると、現代の旅籠形態に変わった。

⑫京藤甚五郎家

今庄宿でひときわ異彩を放つ家がこの京藤甚五郎家である。塗籠の外壁と赤みの強い越前瓦の屋根の上に、卯建(うだつ)の上がっているのが特徴である。天保年間(1830～44年)の頃の建物で当時は造り酒屋であった。厚い土壁や土戸に周囲が覆われた土蔵づくりで、燃えやすい木の部分が外に出ないように建てられており、屋根には隣から火が移るのを防ぐ卯建や、二階部分には袖卯建があり、完全な防火構造になっている。

一般の町家は敷地間口いっぱい建てるのが普通であるが、当家は主屋の左に前庭をとり、奥に座敷を配する本陣形式をとっている。今庄宿内では脇本陣格の建物であり、部屋の構造は厚い壁で客間と生活の間が仕切られている。幕末の国学者・歌人の橋曙覧や、明治維新の立役者の岩倉具視、由利公正の書が所蔵されており、また水戸天狗党の一行が宿泊し、造り酒屋であった当家の酒で風呂を沸かして浴したというエピソードや、刀傷をつけた柱が残っている。

⑥脇本陣跡(旧加賀本陣・旧北村新平家)

江戸時代の本陣の予備として建てられた宿泊施設である。本陣が使用中の場に利用された。規模の点では本陣には及ばないが、門構え、玄関付の本陣に準じるものもあり、村の有力者が経営していた。

この脇本陣は特に加賀の殿様が利用したので、加賀本陣と言われた。

⑦昭和会館

昭和5年、今庄の篤志家田中和吉氏は私財を投げうって社会教化(現在の社会教育)を推進する拠点として、鉄筋コンクリート三階建ての昭和会館を建設、宿泊のできる研修の場として県内の多くの団体が研修した。

昭和30年からは今庄町役場として、昭和62年の改修後は、今庄地区の公民館として利用されている。

高札場跡(こうさつば)

⑤高野伝六家 ③旧谷屋

幕府または福井藩が禁令を人々に示すために、板に書いて一定の場所に掲げ、守らせたものが高札である。忠孝札、毒薬札、切支丹札、口留札、古駄貫札等のおよそ十種の禁令があった。

火事の時の消失を恐れて、付近に貯水池があった。今庄には高野伝六家と谷屋に高札場があった。

問屋跡(といやあと)

⑩旧右衛門佐跡

問屋は近世宿役人の長である。問屋場で年寄の補佐のもと、帳付・馬指

などを指揮して宿駅業務を遂行した。庄屋などの地方役人・町役人を兼務することが多かった。 また、江戸時代の卸売り業者として、荷主から委託された貨物に手数料をとって仲買人に売りさばいたり、荷主から貨物を買って取りさばいたりして繁盛した。

羽根曾踊りには「ここは今庄の右衛門佐の門か、お辰お出やれ荷を渡す」と唄われ繁盛の様子が偲ばれる。右衛門佐は他に大野屋・谷屋とともに問屋を務めた。 後、嘉永4年(1851年)平塚屋と交代した。

⑩大野屋

大野屋は他に右衛門佐・谷屋とともに問屋を務めた。

④平塚屋

嘉永4年(1851年)問屋右衛門佐から交代した。

平塚屋は、大野屋・谷屋とともに問屋を務めた。

③旧谷屋

谷屋は大野屋・右衛門佐とともに問屋を務めた。

燧ヶ城址

この左手山頂には、平家物語や源平盛衰記などでよく知られている燧ヶ城址(海拔270m)がある。山頂まで約20分で登れ、途中にはブナ林がある。燧ヶ城址の下には、鹿蒜川沿いに木ノ芽峠へ通じる北陸道と、山中峠への道筋、更に日野川と並行して栃ノ木峠へ通じる北国街道が、いずれもこの麓で交わる。すぐ近くの杣山城と敦賀金ヶ崎城とともに、この城は北陸の関門を制する重要な場所であった。

『源平盛衰記』によると

寿永2年(1183年)4月、平家は木曾義仲追討のため、平維盛の率いる十万の大軍を北陸路へ差し向けた。義仲は越後の国府にいて、燧ヶ城は仁科太郎守弘や、平泉寺齋明威儀師(へいせんじさいめいいぎし)を大将に立て籠もり、日野川を堰き止めて周囲一帯を水浸しにして、大軍を迎えた。しかし北陸道第一の城郭なりといわれた燧ヶ城も、齋明威儀師が平家に内通するに及んで、たちまち陥落し、義仲軍は敗走した。その後5月俱利伽羅峠の合戦に義仲は勝利し、7月には上洛した。

南北朝時代になると、再びこの城は攻防の戦場となり、延元元年(1336年)には、今庄入道浄慶(いまじょうにゅうどうじょうけい)が足利方の将として立て籠もり、南朝方新田義貞軍に味方して挙兵した杣山城の瓜生保軍と対抗、敦賀金ヶ崎との連携を絶つ作戦に出た。

『太平記』には、新田義顕、脇屋義助らの行軍に際し、由良光氏(ゆらみつじ)の節義に感動した浄慶が金ヶ崎への道を開いたというエピソードが記されている。

戦国時代の天正3年(1575年)には、越前一向一揆の総大将下間筑後法橋頼照(しもつまちくごほうきょうらいしゅう)が藤島超勝時、荒川興行寺の一揆とたてこもり、信長軍と対戦したと伝えられている。このようにこの燧ヶ城は、数世紀にわたり戦略上の重要な拠点として利用されてきた。

尚、現在残っている土塁・石垣等は戦国時代末期のものである。

幾多の戦い地燧ヶ城址も現在は憩いの広場として、又今庄の町並みが一望できるハイキングコースとして町民に親しまれている。